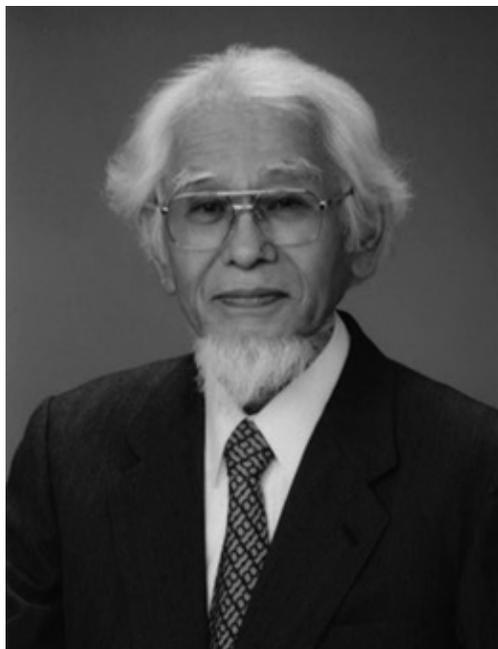


追悼——加藤邦男先生の建築世界

田路 貴浩 京都大学大学院 工学研究科



2019年3月31日、加藤邦男先生は静かにその生涯を閉じられました。83歳でした。病院では時折、好きな音楽を聞きながら穏やかにお過ごしになったと伺っています。

加藤先生といえば顎髭がトレードマークでしたが、髭が象徴する権威主義的なところはいっさいなく、多弁ではありませんでしたが、学生との接し方はたいへんリベラルで、研究室にはいつも自由で闊達な雰囲気が広がっていました。そういう私は、若気の至りから、後輩相手に先生の仕事をさかんに批判していましたが、研究室にはそうした言動も許容する自由な空気が満ちていました。

加藤先生は京都大学建築論を継承した建築家であり、建築論研究者でした。京都大学の建築論は森田慶一に始まり、増田友也へと引き継がれましたが、

二人の先達とも建築家と研究者の両立というたいへん困難な道を歩まれました。そして加藤先生もこのスタイルを継承し、最後まで設計と研究、その双方に従事されました。「机にかじりついてやりなさい」。そうおっしゃっては、筆記具一式とロールトレペ、三角スケールをもって研究室にやってきて、学生たちに混じって製図板に向かい、まさに机にかじりついて黙々とスケッチされるのでした。こうして先生はフランスの古典主義的精神に魅せられつつ、建築家の制作する精神を探究し、建築の設計に打ち込まれました。

宝塚造形大学(現・宝塚大学)で開催された講演会でのこと、先生は講演の最後に研究対象とされていた詩人ポール・ヴァレリーからある一節を選び、フランス語で朗読されました。日本語での訥々とした講演とは違って変わり、朗々と読み上げられたフランス語の美しい響きがいまでも思い出されます。フランス語がつくり出す明晰でかつ叙情的な世界を、そして森田慶一先生が探究した古典主義的知性による世界を、加藤先生は建築家として、建築論研究者として

造りあげたのです。

加藤先生は学生時代から絵が得意で、いつも奔放で魅惑的な作品をつくっていたと聞いています。ところがパリに留学するとフランスの古典主義的抑制に強く感化されることとなります。1959年からエコール・デ・ボザールに学び、次いでミッシェル・エコシャル都市建築設計事務所で都市計画部門主任を務めています。エコシャルはル・コルビュジエと親しく共同したことのある建築家で、加藤先生は自分のことをル・コルビュジエの「孫弟子だ」とおっしゃっていました。

1964年に帰国すると京都大学の助手に採用され、増田先生のもとで大阪万博会場計画(1967)に参加し、フランスで学んだ地域計画のノウハウを発揮することとなります。先生はチームの中心的役割を担っていたようで、わざわざモントリオール博覧会会場を視察し、その計画を批判的に検討しながら大阪万博計画案をまとめました。

その後、1970年代からは精神病院の設計に取り組むこととなります。精神病理学は当時最先端の学問領域でしたが、精神病院の計画方法はまだまだ整備されていませんでした。そうした中で、岩倉病院精神科病棟(1973-1975)を皮切りに、石川県立高松病院(1977-1982)など多数の計画が実現し、精神病院計画学に大きな貢献を残しました。

続いて、加藤先生は舞鶴市で一連の公共施設を手がける機会を得ています。その最初が舞鶴市総合文化会館(1980-1981)です。先生の言うパラペットの「バンド」が全体を一つにまとめ、繊細なコンクリートルーバーがリズムをつくり、うねる壁面と傾斜する屋根がダイナミックな変化を与えています。グリッドによる厳格な格率と遊戯的な逸脱、加藤建築の真髓が余すところなく表現されています。

私が修士課程に進学した頃、総合文化会館はすでに完成していて、M1の4人には舞鶴市の新しいプロジェクト、引き揚げ記念館、図書館、斎場が割り振られました。斎場を担当することになった私には、まず狭い谷間の敷地の造成スタディが命じられました。一人で作ったコンタ模型はかなりの急斜面になりましたが、先生はその地形が不正確であることをすぐに発見するのです。加藤先生に叱られたのは後にも先にもこの時だけでした。普段は穏やかな先生でしたが、「コンタを切り出す前に、グリッドを引かないからズレるのだ」と強い口調で諭され、すぐに作り直すように命じられました。自由な曲線は精確なグリッドによって規制される。このとき、私は古典主義の洗礼を受けました。

加藤先生の最大の建築作品は、積水化学工業京都技術研究所です。このプロジェクトの最初から完成まで担当させてもらったことは、私にとってこの上ない幸運でした。この施設は、オフィス、試作工場、研修棟、講堂、ラウンジ、体

育館などを含む複合建築物で、それぞれの機能にはまったく異なる大きさの空間が必要とされました。いったいこれをどうやって一つの建築にまとめるのか。加藤先生は最初から一貫して敷地全体を均質なグリッドで覆い、その上で諸機能を配置することを求めました。正方形グリッドの部分的な変形はいつさい禁じられました。ところが予算オーバーが分かると、先生はグリッド寸法を90%縮小することにしたのです。いま思えばよくある手法とはいえ、古典主義的原理を教え込まれつつあった私にとっては青天の霹靂でした。でもこれが制作における偶然ということなのでしょう。国道1号線に面するこの建物は、トラックが行き交う喧噪とは対照的に、いまでも端正で静謐なたたずまいを保っています。

建築論研究者としての加藤先生は、ポール・ヴァレリーの思索の山から建築論を取り出すという困難な課題に取り組みました。そもそもヴァレリーのテキストは、言葉は平易でも、書かれた思索はきわめて難解とされています。ヴァレリーは建築家への憧れから「エウパリノス」などの建築論を著しましたが、加藤先生は実際に建築を制作する建築家として、ヴァレリーの建築論を自らの建築制作の反省として再解釈しました(『ヴァレリーの建築論』、1979)。建築家の制作する精神の解明は、森田先生の研究に誘導されつつ、ウィトルウィウス建築書における建築家像、さらにはプラトン「ティマイオス」の造物神デーミウールゴスをとおした宇宙論的建築家像の解明へと進んでいきました。一方、「ル・コルビュジエの孫弟子」として、建築から絵画、彫刻へと及ぶル・コルビュジエの広大な制作の精神にも関心を寄せ、論考集とも呼ばれるべき大部の書籍『ル・コルビュジエ事典』の翻訳チームを統括されました。

先生が日本の建築論に残したもう一つの大きな功績は、ノルベルグ＝シュルツの邦訳です。『実存・空間・建築』(1973)は建築空間論に実存主義を導入したノルベルグ＝シュルツの主著の一つですが、加藤先生によるその「あとがき」は要領を得た解説であるばかりでなく、ノルベルグ＝シュルツの仕事を森田慶一や増田友也の空間論研究に接続しようとする意欲的なエッセーにもなっています。

ノルベルグ＝シュルツのもう一つの重要な著作『ゲニウス・ロキ』(1994)も加藤先生によって邦訳されています。ハイデガーの思想がより明確に導入されたこの著書は、ノルベルグ＝シュルツの空間論から場所論への展開を画すメルクマールで、「ゲニウス・ロキ(地霊)」という古代ローマの守護霊の現代的な意義を論じたものです。当時、風景論や場所論が盛んに論じられていましたが、「ゲニウス・ロキ」はそうした議論を活性化する特異な視点を提供することになりました。加藤先生はこの訳書でも丁寧なあとがきを執筆され、「ゲニウス・ロキ」という縁遠い観念をわかりやすく解説し、さらにこれをプラトンのコー

ラにつなげて場所論を展開しています。先生は晩年、コーラを境界論として展開しようとしていました。それはまさにヴァレリーが主題的に見つめていたあの領域、現実世界の背後に潜む潜在的な可能性の領域、想像的夢の領域のことだったのでしょう。

ヴァレリーの「エウパリノス」は、冥界に暮らすソクラテスが弟子のパイドロスをとおし、建築家エウパリノスの語りを伝え聞くことから展開する対話篇です。エウパリノスは実際の建築制作をとおして、制作の神秘と作品の感動について思索を深めた人物でした。その話は哲学者ソクラテスを魅了し、自分は建築家の道を捨てたのだと口惜しがらせるほどでした。

パイドロス——あなたが造ることと知ることとの間にどんなに迷われたか、ぼくは今それがよくわかります。

ソクラテス——人間となるかそれとも精神となるか、そのどちらかを選ばなければならぬ。

造ることと知ること、その両方を成し遂げた加藤先生は、ソクラテスに何と声を掛けているでしょう。今ごろ、冥界では新たな対話篇が繰り広げられているのかもしれませんが。

加藤邦男先生の略歴と主要業績

■ 略歴

- 1935年 大阪生まれ
- 1958年 京都大学工学部建築学科卒業
- 1959年 フランス国立美術学校建築学科に留学
- 1962年 ミッシェル・エコシャール都市建築設計事務所 都市計画部門主任
- 1964年 京都大学工学部 建築学科 助手
- 1984年 日本建築学会賞(論文)
- 1989年 フランス芸術文化勲章シュヴァリエ受章
- 1990年 京都大学工学部 建築学科 教授
- 1995年－1996年 日本建築学会近畿支部長
- 1999年 京都大学退官、京都大学名誉教授
- 1999年－2002年 大阪産業大学教授
- 2003年－2017年 一般財団法人 建築研究協会代表理事
- 2016年 日本建築学会名誉会員
- 2016年 フランス国家功労勲章受章
- 2019年 逝去(3月31日)

■ 主な建築作品

- 1966年 関西学院中部矢内記念館
- 1967年 西宮市民会館
- 1970年 日本万国博覧会基幹施設
- 1977年－1982年 石川県立高松病院
- 1983年 舞鶴市総合文化会館
- 1988年 舞鶴市引揚記念館
- 1989年 舞鶴市斎場
- 1991年 積水化学工業京都技術センター
- 1992年 関西日仏交流会館(ヴィラ九条山)
- 1997年 名古屋芸術大学美術学部絵画棟
- 2001年 光愛病院

■ 著書

『フランスの都市計画』鹿島出版会、1965年

『ヴァレリーの建築論』鹿島出版会、1979年

『新建築学大系6 建築造形論』(共著) 彰国社、1985年

■ 訳書

ノルベルグ=シュルツ『実存・空間・建築』鹿島研究所出版会、1973年

ノルベルグ=シュルツ『ゲニウス・ロキ』(共訳) 住まいの図書館出版局、1994年

『ル・コルビュジエ事典』(監訳)、中央公論美術出版、2007年

■ 主な論文

「西洋古代における建築家像 —— ウィトルウィウス建築書の解釈を通して」日本建築学会計画系論文報告集、第396号、1989年

「プラトン、『ティマイオス』における宇宙論的建築家像、建築史学、第12号、1989年